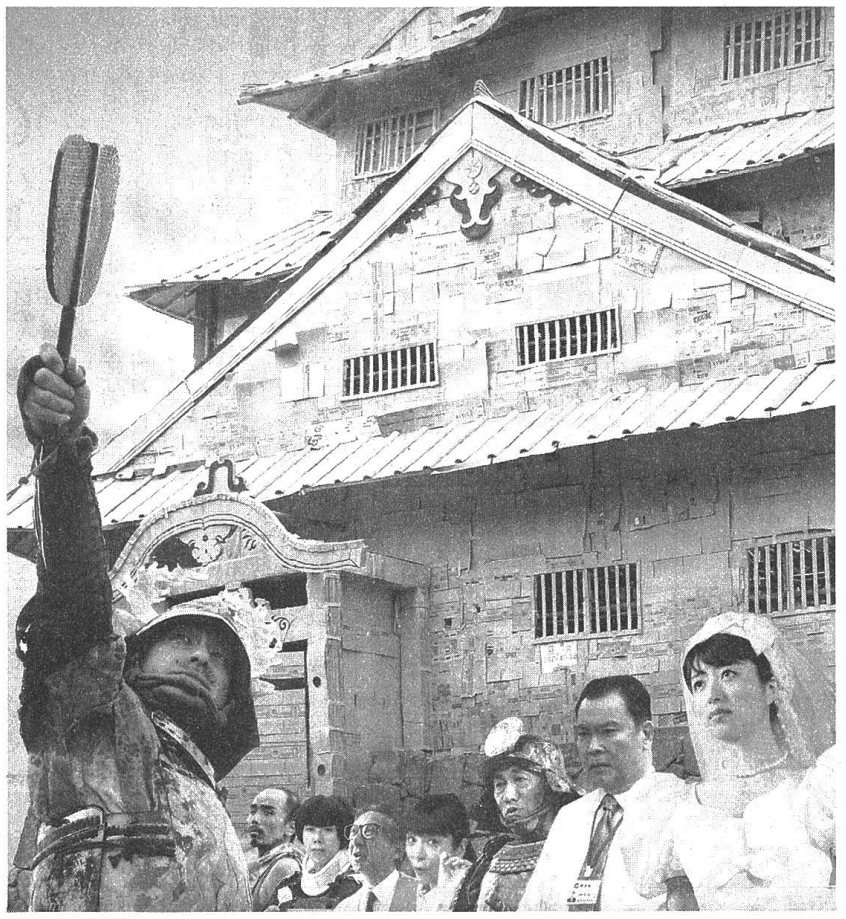
# 痛快！築城エンターテイメント！
# 「築城せよ！」スペシャル座談会

**（財）人間自然科学研究所・小松電機産業（株）が協賛した映画『築城せよ！』が、いよいよ明日から公開される。社会文化活動の一環として本作の支援を買って出た小松昭夫代表取締役は、「どんな困難も厭わず、人々が力を合わせて一つのものを作り上げていく、そのものづくり精神に深く共感した」という。今回、小松社長と本作の監督である古波津陽さん、出演した女優の藤田朋子さんを迎え、撮影現場での様子、そして新しい時代に求められるリーダー像や組織論について語っていただいた。**



©2009「築城せよ!」製作委員会

**益田**　小松社長が『築城せよ！』に支援された理由として、この映画にどんな可能性を見出されたのでしょうか。

**小松**　プロデューサーから話があった時に、あ、面白そうだなと。原作ものやテレビ局主導の邦画が多い中、『築城せよ！』は完全オリジナルの独立プロ作品。私も自分のアイデアから起業した人間なので、同じ心意気を感じました。しかも、段ボールで城を作るという非常にユニークな物語に、現代の本質と新しい時代を切り拓くヒントがあると思ったんです。

**古波津**　社長はこの映画をご覧になって、「このバカバカしい行為の中に崇高な“信”がある」とおっしゃった。信頼の上に成立する貨幣経済を引き合いに出して、「同じ紙でも紙幣と対極にある一見無意味な段ボールに価値を見出している、その対立構造が面白い」と。とても興味深い解釈だと思いました。

**小松**　その信頼から絆が生まれますよね。それは、新しいことを生み出すフィールドができあがったということでもあるんです。

**古波津**　面白いことに、物語の中だけじゃなく、それが製作現場でも起きているんです。撮影が終わった今でも、ロケ地の愛知県猿投町やその近辺で、映画に関わってくださった方々の輪が広がっている。そのつながりが継続しているのは、普通の映画製作では珍しいんじゃないかと。

**藤田**　撒いた種が育ってるんですね。本当にたくさんの方々にご協力いただきましたけど、みんな気持ちよく参加してくださいましたよね。エキストラの方々だって、普通あんなに待たされたら、文句言って帰っちゃったりするんだけど（笑）。

**古波津**　山奥だったから帰れなかった（笑）。今、フィルムコミッションの討論会などに呼ばれると、ほかの地域の方々にとても羨ましがられるんです。僕ら製作側と受け入れ側の地元が対等な立場でやり取りできたという点で。

藤田朋子／ふじたともこ
1965年東京都生まれ。87年ミュージカル「レ・ミゼラブル」でデビュー。88年NHK連続テレビ小説「ノンちゃんの夢」でドラマデビュー、注目を集める。90年より「渡る世間は鬼ばかり」シリーズ（TBS）に岡倉大吉の5女・長子役でレギュラー出演。ほか数多くのドラマ、映画、舞台に出演している。近年は定期的にライブ活動も行い、活躍の場を広げている。

**小松**　まさに、武田信玄の言葉ですね。「人は城、人は石垣……」ってね。（＊世を治めるのは堅固な城より人の力。情理は人をつなぎとめ、国を繁栄させるが、恨みは反発を招き、国は滅びる）。

**藤田**　確かに、こんなにチームワークのいい現場は珍しいと思いますね。エキストラさんからスタッフ、新人俳優からベテランの役者さんまで、全員が同じ立ち位置で仕事ができましたから。こういう雰囲気ができるかどうかも、上に立つリーダーによると思うんですけど。

**小松**　そうですね。私はこの映画はまさに「機雷」だと思う。どこから触れても爆発力がある。それは今、どういうリーダーが望まれているのか、地方自治はどうあるべきなのか、そんなことも問うている、非常に多様性を持った映画だと思ったからなんです。

**藤田**　いろんな切り口がありますよね。社会に疑問を投げかけながら、娯楽作品としてもすごく楽しめる。小さなお子さんが見ても面白いし、若い世代にはラブロマンスを楽しんでもらえるし、ご年配の方々は同じ世代の登場人物に共感できるでしょうし。

**益田**　リーダーのお話がありましたが、それぞれ経営者、映画監督というトップに立つ者として、新しいプロジェクトを組織で進めていくには何が一番重要だとお考えですか。

**小松**　まだ見ぬアイデアを現実化させるためには、何のためにするのか、その意義をどんなに時間をかけてでも明確にすることです。次に全員がその意義を共有すること。これはイマジネーションの共有化ともいえるんですが、そこには多様なキャラクター、個性も同時に必要です。参加者が自由に発想し、意見を交わせる時間や空間も与えなければいけない。

**古波津**　映画もまったく同じですね。特に映画は、各々専門分野の違う異業種の人たちがたくさん集まってくる現場なので、目的を明確にすることと意思疎通が大切です。その手助けとなるのは、脚本。その設計図さえしっかりしていれば、僕に多少まとめる力が不足していたとしても、有能な人たちは自分の乗っかり方を見つけてくれるんです。

**藤田**　脚本は本当に面白かった。役者にとっては、大きなプロジェクトだろうが小さなプロジェクトだろうが、信頼できる台本かどうかが一番大事なことですから。

**古波津**　スタッフもキャストも各人がものすごく想像力を働かせて、自分なりの完成図を描いてくる。当然最初はその振り幅が大きいんですけど、脚本が明快であればベクトルが見当違いな方向に向くことはない。だから、ある程度の幅広さは、むしろ面白いものとして取り入れていました。先ほど社長や藤田さんが言ってくださったように、物語自体、さまざまなテーマと要素を包括しているものですし。

**小松**　よく言われる組織論でね。ゲマインシャフト、ゲゼルシャフト、パートナーシャフトっていうのがあるんです。ゲマインシャフトは家族的で情緒的な共同体。ゲゼルシャフトは明確な数字目標と使命と効率で構成された組織。で、最後のパートナーシャフトは明確な目的、意義の共感で結ばれた共同体。ボスではなくコーディネーターを中心に、価値観を共有する専門家集団が臨機応変に携わっていくという形です。これは国家はもとより、自治体、企業、プロジェクトチーム、市民団体の経営において世界的に注目されるようになりました。対立の文化から共生の文化への移行期に入ったともいえるのではないでしょうか。お話をうかがう中で、この『築城せよ！』の現場もまさしく、パートナーシャフトだったんじゃないかと思いますね。

**古波津**　僕は、才能ある人たちの声を受け入れる束ね役であり、そして一緒に成長していけるリーダーでありたいと思っているので、そのお言葉はとても嬉しいですね。

益田祐美子／ますだゆみこ
1961年、岐阜県生まれ。金城学院大学卒、NHK岐阜・名古屋でニュースや子供向け番組に出演後、月刊「Home Economist Wise」誌記者を経て、コンテンツ企画集団「平成プロジェクト」を立ち上げる。日本＝イラン合作映画「風の絨毯」（03／カマル・タブリーズィー監督）を皮切りに、ドキュメンタリー映画「平成職人の挑戦」（05／乾弘明監督）、最新作「蘇る玉虫厨子」（09／乾弘明監督）を製作、著書に「私、映画のために！億5千万円集めました」（角川書店）、内閣府地域活性化委員、第2・3回経済産業省ものづくり大賞審査委員。

古波津陽／こはつよう
映画監督。1973年、東京都生まれ。国内や海外で独自に映画演出を学び、ＣＧやデジタル技術を駆使した独特の映像スタイルを築く。『トランスファー』（07）や、『マリオネット』（07）が世界各国の映画祭で賞に輝いており、今回、サンフェルナンドヴァレー国際映画祭で最優秀外国語映画賞を受賞した自身の短編をもとに、『築城せよ！』を監督。

## 「築城せよ！」あらすじ

深刻な過疎化に悩む猿投町。かつてあった城を復元し、観光集客を図りたい住民と、工場を誘致して雇用・税収を拡大させたい町長一派が対立していた。そんなある日、４００年前に築城の夢破れ、無念の死を遂げた戦国武将・恩大寺の霊が蘇る。現世で与えられた時間はわずかに３日。試行錯誤の末、段ボールで城を建てることを思いつき、建築を学ぶ女子大生ナツキを棟梁に据える。が、工場誘致派の町長らは築城を阻止しようと立ちはだかる。

---

西暦2009年―無名の戦国武将、段ボールで城を建てる?!

# 築城せよ！

## あす6月20日[土]より全国順次ロードショー！

## 藤田朋子さん来場！
**6月27日[土]**
**T・ジョイ出雲／松江SATY東宝**
時間等詳細は、後日、劇場ホームページにて発表致します。

片岡愛之助　海老瀬はな　江守徹　阿藤快　藤田朋子　監督・脚本：古波津陽　脚本：浜頭仁史　プロデューサー：益田祐美子　スーパーバイザー：小松昭夫　製作：築城せよ製作委員会　配給：東京テアトル

映画『築城せよ!』公式ホームページ　http://aitech.ac.jp/~tikujo/

協賛：小松電機産業（株）／（財）人間自然科学研究所

上映期間 6月20日[土]～7月1日[水]　ゆめタウン出雲東館3F　T・ジョイ出雲　0853（24）6000

上映期間 6月27日[土]～7月3日[金]　松江サティ3F　松江SATY東宝　0852（28）2100

上映期間 8月22日[土]～8月28日[金]　米子駅前サティ3F　米子駅前SATY東宝　0859（35）2115

※上映時間等、詳しくは各劇場まで、お問い合せください。※当日料金、サービスデー等は、劇場により異なります。

## 『築城せよ！』を題材に社会現象を語るようになるだろう

この映画はキライだね。平和を生み出す機雷。地味だけど、多面的な魅力があり、どこに触れても、とてつもない爆発を起こす。方向性を失い、もがいている"第三次世界大戦（金融経済戦争）後"とも言える状況の中で、光明が見い出せる作品。

見終わって真っ先に思い浮かんだのが「和譲（わじょう）」という言葉。これは出雲大社の神語「幸魂奇魂（さきみたまくしみたま）」から生まれる「和魂（にぎみたま）」、聖徳太子の「和をもって貴しとなす」に、二宮尊徳翁の報徳思想に出てくる「推譲（すいじょう）」を組み合わせて、熊野大社前宮司で出雲大社教の千家達彦管長が作られた造語。相手を思いやる心から知恵と希望が生まれ、勇気と行動「荒魂（あらみたま）」が加われば、社会が変わるといわれている。一霊四魂とも呼ばれ、日本独自の言葉。オバマ政権で用いられるようになった、ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授が提唱しているスマート・パワー論（軍事力や埋蔵資源などのハード・パワーだけでなく、文化などのソフト・パワーを組み合わせて外交を行うという考え方）にも通じるところがある。

私は、エンドロールの最後に「和譲」という言葉を入れることを提案し、プロデューサーと監督にご了承いただいた。

日本では織田信長による楽市楽座と安土城の築城を通して“信”（言ったことはやる、約束したことは守る）から生まれた分業が広まり、近世が始まったといわれている。社会を支える紙幣・御札（しへい、おふだ）は究極の信。信が無ければ、ただの紙。紙は“神”にも通じる。脇役の“段ボール”を主役にした目の付け所は、信の再構築を浮かび上がらせ、見る人の胸を打つ。

映画の最後で、みんなで作り上げた段ボール城は崩れてしまう。みんなが価値を認めた瞬間に、感動と感激が沸き出し、崩れるからこそ余計に人々の心に残る。この作品は関わった人々の心に“絆・信”が生まれることを知らしめた。"紙の城づくり"という現代のおとぎ話の形を借りて、"信の築城"を果たしたのだ。

混迷の時代に、無名の若者たちが学校と過疎化した街の人々を巻き込み、力を合わせて作り上げた、小さな映画。やがて人々はこの『築城せよ！』を題材に社会現象を語るようになるだろう。私はそう確信してやまない。

小松昭夫（こまつ・あきお）
（財）人間自然科学研究所 理事長　小松電機産業（株）代表取締役　（株）平成プロジェクト 代表取締役会長